

キーワード（法華經の行者・依法不依人・生身の釈迦如来）

1、法華經の行者

日蓮（1222—82）が、みずから「法華經の行者日蓮」と称したことは、周知のとおりである。その表明から、歴史的に法華經信仰を中心とする「持經者」の存在を認めつつ、その「持經者」の信仰とは異なる日蓮の意図を汲み取ることができる。

そこで、あらためて日蓮が自称した「法華經の行者日蓮」の意味をたずねてみると、法華經の「持經者」が經典の読誦や解説等に主眼を置き、その経力を依拠しつつ信仰儀礼を媒介として、死者への追善供養や現世の祈りを行ったのに対して、日蓮は、法華經という經典を絶対媒介として、釈尊に直参し、みずからが末法の世における大導師を志向したことに、その特質がうかがえる。それは、日蓮が自己をどのような仏教者としてイメージしたのかという問題と深い関わりをもつが、日蓮が真の釈尊の弟子を目指し、しかも「日本第一の智者」となることを誓願していることから、そのことがうかがえる。

叙上のことを確認すると、日蓮が真の仏弟子を目指し、しかも末法の世における日本第一の智者を志向するとき、法華經という經典は、釈尊の人格体としての意味を持ち、その生身の釈迦如来の仏勅が日蓮の行動の軌範となり、日蓮の人格体に釈尊の全身がよみがえるという側面を有している。このことから、日蓮が法華經のみならず、一切經を受容するとき、經典は黒い文字の典籍という意味にとどまらず、仏教の教主釈尊の実語であり、真実の教え（開目抄・定本遺文539頁）ということになるのである。

2、「依法不依人」

ところで、日蓮が理想の仏弟子像を探求する過程において、それを決定づけたものは、いったい何であったのかをたずねてみると、それは仏教の教主釈尊であり、一切經であった。たとえば親鸞にとっての法然房源空の存在、あるいは道元にとっての天童如浄という存在とは明らかに異なる。すなわち日蓮が八宗・十宗を兼学する過程において、各宗の祖師たちに随うことなく、中国の陳・隋時代に活躍した天台大師智顛（538—597）が、「専ら經文を師として一代の勝劣をかんがへしがごとく、一切經を開きみる」（報恩抄・定本遺文1194頁）という態度を堅持し、その結果、一切經の中で法華經が大王であるとの結論に到った（同上・1195頁）。そして、この方法を選取するうえで決断づけた經文が、『大般涅槃經』の「如来性品」に説示される「依法不依人」（正蔵第12巻401頁b）の文であった。この「法に依る」という場合の「法」の概念には、釈尊および釈尊の悟りが包含され、「人に依らざれ」という「人」には、菩薩以下のすべての祖師が包摂されているのである（報恩抄・1194頁）。

以上のことから、日蓮にとって經典とは、釈尊一代の教説（真理）であると同時に、教説が示されている仏格（釈尊）をも包含されていることが理解されるのである。